

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 61 回 「古田の涙」～メサイヤのしずく雫？ もろば両刃の剣？

プロ野球業界が揺れに揺れている。以前もこのコラムで、野球について軽口を述べたことがあるが、正直言って、これほど複雑、かつ奇妙なことになるとは思わなかった。

昨日（9/17）の深夜、古田選手の「涙」を見ては、野球ファンに限らず、多くの日本人の同情と感動を呼び、選手達のストライキ行使に、全世論を挙げて指示する環境が整ったといっていいただろう。新聞は号外を出し、一般紙も一面トップ、テレビはテロップで臨時ニュース扱いし、天変地異たる社会問題化の如くの形相を呈している。

小生、自称「長嶋ファン」の一人だが、今回の騒動（？）どうもイマイチ、しっくりいかないものがある。多くの人の反感を覚悟しつつ、自問自答してみたくなった。

まず素朴な、感情論である。司法当局の見解はともかく、古田や高橋や、松坂や中村ノリや清原が、労働組合員で労使交渉をする「絵」は、なんとしても馴染まない、つまり、絵にならない。我々庶民の一生分の収入を、数年間で稼ぎ出し、死にもの狂いで働いている雰囲気は無い。「夢と感動をありがとう」とは言うものの、生活観溢れる「労働者」では、決して無いし、そうでないからこそ、憧れのスターであった。それが今更、労使交渉とは、実に皮肉な「響き」がしてならない。

仮に百歩譲って、労使交渉であるとするれば、彼らは一体、何を交渉しているのか。賃金値上げ、労働条件の改善なら話は分かる。「合併反対」、「経営方針を変えろ」とか、「経営者が気に入らん」に至っては、労使交渉のテーマになりえない経営事項であるはず。株主総会や株主代表訴訟なら当然の論理だが、労働組合としての団体交渉のテーマではない。銀行や卸売業の業界再編の渦中に、合併が組合交渉の中で決定された例は、恐らく一件も無い。経営者交代を団体交渉で話し合う事例も、皆無である。

それをただ、ファンの感情に訴えて、「お涙頂戴」式のナイーブな交渉術は、何としても幼稚である。相変わらず、テレビの図式は劣悪単純で、「悪代官役」の渡辺オーナー、正直で可愛そうな古田達、役者はそろった。没個性各局が一斉にやるもんで、純粹無垢、判官鼻頂の日本人が、すっかりマスコミにのせられて、その、根本原理、本質を全く見過ごしてしまう...何年経っても、同じことを繰り返している。

経営側にも多くの問題がある。しかし、ここで選手達がストライキを実施して、何が改善されるのだろうか？経営者も選手達も、マスコミも「ファンのため」と異口同音に言っているが、下手すると、プロ野球全体の凋落に、拍車をかける結果になりかねない。一言にファンといっても、中には、そんな心配をしている「野球好き」もいることを、忘れないでいてほしい。あの、「古田の涙」が、「メサイヤの雫」たれ！そう願っている。